

# 不可視化される LGBT

## —トランスジェンダー当事者への言語意識インタビューを通して—

宮崎虹歩(専修大学大学院生)

### 1. はじめに

近年、日本社会において「LGBT」が話題になっている。2015年には三省堂が主催する「三省堂 辞書を編む人が選ぶ 今年の新語(2015)」で「LGBT」が第3位に選出され、東京都渋谷区・世田谷区で「同性パートナーシップ制度」が開始された。2020年現在、その動きは全国の自治体に広がり、LGBTの存在が社会的に認められる機会も増えてきたと言える。

一方、アカデミックな視点で彼/彼女らを見たとき、言語研究では、LGBTを対象とした研究は未だ少ない。海外では、「クィア言語学」や「ラベンダー言語学」などの名称で分野が確立しているが、日本においてLGBTは不可視化されてきた存在だと考える。理由として、外見で、彼/彼女らが、ゲイやレズビアンであると判断することは出来ないこと、当事者が自ら話さない限りは相手に気づかれにくいことがあげられる。当事者に気づかないがために、非当事者は「ホモ」や「レズ」といった差別用語を無意識に使用し、相手を傷つけてしまうことがある。また、自分自身のセクシュアリティはいつ、どこで変化してもおかしくはない。現在非当事者である人も、当事者になり得ることがある。

社会制度が少しずつ当事者に対応してきているが、その多くは当事者側から声を上げた結果である。本研究では、不可視化されがちな当事者に非当事者側から歩み寄り、当事者の生の声を聞きたいと考えた。日本語には、男女で話す言葉が異なるという特徴がある。そこで、身体と心の性に違和を持つトランスジェンダー当事者に注目し、性差を始めとした日本語の特徴について、どう感じているのか言語意識を調査するインタビューを行った。

### 2. 調査の目的

本研究では、トランスジェンダー当事者に焦点を当てる。トランスジェンダーは、身体と心の性に違和を持つ。この違和で言葉が話すときに、何か困ったことはないのだろうか。非当事者の視点で推測する。例えば、話者の外見が女性で、一人称が「俺」や「僕」だった時、聞き手は違和感を覚えるのではないだろうか。立場によっては、話者に注意をするかもしれない。これはあくまで筆者の推測であり、実際のことは当事者に聞かない限りわからない。

そこで、本研究では、トランスジェンダー当事者に実際に会って、今までの経験や、言葉への意識について聞くことを目的とした。

### 3. 調査の概要

本研究では、トランスジェンダー当事者2名にインタビュー調査を行った。以下、調査対象(§3.1)、調査の方法(§3.2)の順に述べる。

#### 3.1 調査対象

調査対象者は、トランスジェンダー(FTM)<sup>1</sup>を自認している、成人した当事者2名(以下調査対象者と呼ぶ)である。調査対象者は機縁法で募り、筆者の友人に当事者を紹介してもらったため、筆者と調査対象者はこの調査で初めて対面する形になった。なお、インタビューには筆者も司会役として参加し(以下筆者を調査者と呼ぶ)、調査対象者2名と対話した。当事者のプライバシー保護のため、調査にかかわる部分を以下に開示する。

表1 調査対象者

| 調査対象者 | A     | B     |
|-------|-------|-------|
| 年代    | 20代後半 | 20代前半 |
| 出身地   | 奈良県   | 広島県   |

<sup>1</sup> 「Female to Male」の略称。身体の性が女性で、心の性は男性であり、男性の身体になることを望んでいる人を指す。個々人の希望で、ホルモン投与の治療や手術を行う人、行わない人もいる。

|     |             |             |
|-----|-------------|-------------|
| 性自認 | FTM（戸籍上は女性） | FTM（戸籍上は女性） |
|-----|-------------|-------------|

調査対象者は2名とも20代で、それぞれ奈良・広島県の出身である。戸籍上は、女性であるが、性自認は男性である。就職を機に上京、身体の治療を開始し、現在も治療を続けている<sup>2</sup>。

### 3.2 調査方法

調査は、調査対象者2名と調査者で行うグループインタビュー(以下、調査1と呼ぶ)と、調査対象者と調査者が1対1で行う個人インタビュー(以下、調査2と呼ぶ)の2回に分けて実施した。インタビュー全体を半構形式で行い、調査者が設けた質問に対して自由に語ってもらった。

調査1はグループインタビューであり、雑談も交えつつ座談会形式で行った。調査2は、個人に、調査1で気になった発言を取り上げ、再度語ってもらった。なお、調査時間は、調査1が約180分、調査2は、約60分の時間であった。インタビューの内容は、研究協力に関する承諾書の下、録音と文字起こしをした。調査者・調査対象者のプライバシーにかかわる内容があった場合や、調査対象者から申し出があった場合には、録音を一部停止・カットした。

## 4. 調査結果

本節では、調査1(§4.1)と調査2(§4.2)の結果をそれぞれ示す。

### 4.1 調査1の結果

調査1をもって調査対象者と初めて対面したため、調査対象者の基本情報を知ること・調査者と調査対象者の精神的な距離を縮めるため自己紹介を行った。調査が座談会形式だったこともあり、インタビューには、言葉以外の面で当事者として生活する中で困ることや、調査対象者が当事者同士で共感する話など雑談が多く含まれていた。

まず、自己紹介を調査者、調査対象者A・Bがそれぞれ行った。続いて、「普段の言葉遣いについて」という大きなテーマを設け、語ってもらった。調査対象者は自身がいつ、トランスジェンダーを自認したのかカミングアウトし、トランスジェンダーを自認した上での振る舞いや言葉遣いについて話した。

対象者A・B共に、幼少期から性自認は男性であるが、自身の身体が女性であるために違和感を持つ。Aは性自認に合わせて「男性として」振る舞う。一方、Bは、中学校入学時に制服のスカートを穿かず、ジャージで登校したところ、教師に指摘を受け、「女性として」振る舞うようになった。当時をBは「女の子を演じた」と話す。テレビで話す女性の言葉や、周りの同級生に合わせる言葉遣いを意識したという。

また、地方出身者である2名は自身の方言について振り返った。Aは関西弁を、「男女差がない」とした。関西弁の特徴として、女性が荒い口調で話すため、地元では言葉の男女差を感じなかったという。一方Bは、Aの話を受け、広島弁を「男性が強い」と話した。関西弁とは対照的に、広島弁は男性の口調が荒いため、上京後に共通語を聞いて、違和感があったという。

続いて、参考資料として、トランスジェンダー当事者の遠藤まめたのエッセイ『オレは絶対にワタシじゃない』より、小学生の頃、一人称「私」で作文を書くことへの抵抗があったことを綴ったページを配布した。エッセイの感想をふまえて「自分が使用したい言葉遣いについて」というテーマで話した。

エッセイを読んだ調査対象者2名は、一人称「私」に違和感がないと話した。AもBも周りの女子が「私」を使っておらず、特にAの出身である関西では女性の一人称が「うち」であるため、「私」が女性の一人称である認識がないとした。Bは、小学生の時、男女ともに作文を書く時には、大人になったときに「私」が使えるように、と、一人称は「私」を使う教育を受けたという。更に両者は、一人称「私」を男女が使える、強い大人が使う、大事な時に使うといったイメージが幼少期に印象があったとした。

調査対象者はエッセイの感想後、自分が使用したい言葉遣いについてそれぞれ語った。Aは、幼少期から性自認に沿った「男性として」の振る舞っているため、自分が使いたい言葉は特にないと話した。Bも、現在は「男性として」振る舞っているため、今は意識して使用したい言葉遣いはないとしたが、学生時代に「女性として」振る舞っていた時には、男っぽい話し方がしたいと思っていたと明かした。

調査1では、調査対象者2名の経験や、日常を過ごす中での言葉遣いについて語ってもらった。本調査でわかったことを以下にまとめる。

- (1) 同じトランスジェンダーでも、その人の意識によって、言葉遣いは男性寄りにも女性寄りにも変化する

<sup>2</sup> 調査を行った2019年9月時点の状況である。

(2) 日本語の性差を感じる部分は、方言が大きく関わっていることがある  
これらの2点をふまえ、調査2では調査対象者2名それぞれに詳細を聞いた。

## 4.2 調査2の結果

調査2は、前項の調査1から約1か月の期間を空け、個別に話を聞いた。まず、調査1で話したことを簡単に説明し、調査1で気になった発言を取り上げ、質問した。

### 4.2.1 調査対象者Aの結果

調査1を振り返った後、約1か月の間に何か意識の変化はあったか尋ねた。Aは調査1以前から身体を男性に移行する治療を受けている。調査1終了後にホルモン注射を打ったことで、約1か月前よりも声が低くなったことを周囲に指摘された。身体がより男性的になったためか、他人から自分に対する態度で、「腰が低くなった」ように感じたという。その結果、人がコミュニケーションをとる際に、性別によって態度や言葉遣いが変化していると気づいたとした。

調査1ではAが、「方言に助けられた」という発言をしており、関西弁には男女差がないと強調していたことから、具体的にどんな場面で方言に助けられたのか詳細を聞いた。

まず、上京後に方言との差で困ったことはないか聞いた。Aは、性差よりも単純に、方言が通じないと話し、困った経験はないという。自分自身が感じることとして、調査1同様、共通語には男女差を感じると話した。

続いて、A自身が学生時代を過ごした関西弁と、上京後の共通語で、感じた違いを語ってもらった。これまで、方言の便利さを語ってきたAだったが、このテーマでは共通語のメリット・方言のデメリットについて話した。共通語のメリットとして、男女差があることで、自分の「男らしさ」の目立たせることができる。一方、関西弁のデメリットは男女で話す言葉があまり変わらないため、「男性らしさ」「女性らしさ」の表現が難しいことだという。男女関わらず、誰に対しても同じような振る舞いや扱いであることで、周囲が「男性として」扱ってくれない可能性がある。

次に、Aがトランスジェンダーを自認した時期に注目し、自認前にはどのような振る舞いをしていたのか質問した。Aは第二性徴で自分がトランスジェンダーであることを自認する。トランスジェンダーが登場するテレビドラマ「金八先生」の再放送があり、トランスジェンダーの存在を知った。しかし、幼稚園の頃から既に周り自分と違う感覚があったという。その違和感を持ちつつも、服装や髪形などの自分の個性を出す部分では男らしさを保っていた。幼少期から現在に至るまで、性自認の「男性」という性に合わせた言葉遣いや振る舞いをしてきた。

調査1で、Bが「女性に溶け込むようにしていた」一方、Aは「男子に溶け込むしゃべり方をしようとしていた」と話した。「男子に溶け込むしゃべり方」とは具体的にどんなものか尋ねるため、男性らしく振る舞う上で、意識していたことや理想の男性がいたのかという質問をした。Aは、周りに合わせる意識はあったものの、意図的に男性らしい言葉遣いをしていたわけではないという。Bが「女の子の演技」をしていた一方、Aは、単に自分が「男として」周りの男友達に合わせ、仲良くするための自然な行動であった。理想の男性像も特になく、Aは自分が意思をもって男性になろうとしているわけではないとわかった。

最後に、Aとの個人インタビュー中に、「トランスジェンダー」という言葉と「性同一性障害」という言葉を当事者はどう思っているのかという新たな話題が出た。調査者自身は、「性同一性障害」は「障害」という表現があり、当事者には失礼に当たるのではないかと考えていた。それに対し、Aは寧ろ「障害でしかない」と話した。A自身が生きたい「男性」という性で生きることができず、「障害」という表現があることで、周囲の人間が「障害だから仕方がない」と捉えてもらえることから、「性同一性障害」の方がA自身を的確に表現できるとした。

### 4.2.2 調査対象者Bの結果

続いて、調査対象者Bの結果を示す。Aと同じく約1か月後にインタビューしたため、1か月間で意識の変化があったか確認した。Bは調査1終了後、周囲の人の言葉を注意深く聞いてみたという。その中で、男女で語尾の聞こえ方が違うことに気が付いた。同じ言葉でも、女性は柔らかく、男性は強く聞こえたと話した。

次に、Aと同じく「方言に助けられた」という発言に注目した。広島弁話者であるBが、方言で便利だと感じることを、不便だと感じることにについて聞いた。Aと同じく、方言と共通語の差から、言葉が通じないことを困るとした。また、広島弁も関西弁と同じく、男女の違いが大きくないため、精神的に楽だと話した。

更に、調査1で、Bは「女性を演じていた」という発言があり、性自認とは異なる振る舞いをしていた。再度焦点を当て、詳細を聞いた。女性を演じる上で、Bはまず言葉遣いではなく、服装や髪形などの外見を周りの女子学生に合わせて、自分の存在が浮かないようにしていた。自分の理想の女子像を作り上げ、自分がその女子を演じるということをし、女子を演じる自分を別の人種として考えていたという。学校にいる間は、女子生徒と時間を過ごすか、学校以外ではどうしていたのか尋ねた。Bは、男性である瞬間を作ってしまうと、女性を演じている自分に疑問を抱いてしまうため、性自認の男性にならないよう、学校以外でも生徒と連絡を取り、性自認を考える時間を逃避していたと明かした。

最後に、Aと同じく「トランスジェンダー」と「性同一性障害」という言葉の捉え方について質問した。BもAと同じく「障害がある」ということを強調した。Bの生きたい「男性」の身体ではないことから、自分を身体の障害を持っているという意識であると話した。

これら調査対象者AとBの調査結果から、わかったことを以下にまとめる。

〈1〉方言にはメリット・デメリットがある

〈2〉性自認に沿った言葉遣いと身体に沿った言葉遣いのどちらかを選択するかによって当事者の環境は大きく変化する

〈3〉「トランスジェンダー」と「性同一性障害」は、当事者と非当事者で意味の捉え方に食い違いがある

以上の3点が、調査2で明らかになった。

## 5. 考察と今後の課題

本節では、調査1・調査2で明らかになった5点を基に考察を進める。

調査1では、同じトランスジェンダーを共有する当事者でも、身体の性もしくは自身の性自認に合わせるかによって言葉遣いに変化しており、調査対象者A・Bでそれぞれが、男性として/女性として振る舞っていた。個人の考え方や価値観に違いはあるにしろ、当事者が両極端な行動を起こしたのは社会的な背景も関係していると考えられる。LGBTがメディアに取り上げられ、認知されるようになったのは近年のことである。もちろん、LGBTがそれまで以前も取り上げられていなかったわけではない。しかし、1990年代には、テレビ番組に男性同性愛者のキャラクターが登場し、LGBTを嘲笑するような企画がお茶の間を賑わせた。このような企画は同性愛者=気持ち悪いといった印象を視聴者に与えた。差別的な発言や態度から自らを守るため、Bのように、自らの性を隠し、自分の意思とは異なる言葉遣い・振る舞いで、世間の「普通」に合わせなければいけないという考えが生まれるのは自然である。

また、今回の調査対象者が地方出身者であったことから、日本語の性差には大きく関わっていることがわかった。Aの話す関西弁、Bの話す広島弁は、男女で使用する言葉が同じであるために性差を感じない。男女差があるとされる共通語も、女性が使用する終助詞「わよ」「わね」「かしら」などが、現在は男女ともに使用率が低くなっており、性差は縮小傾向にある。しかし、調査1で取り上げたエッセイでは、一人称を男女で使い分けた作文の書き方をしていることや、調査対象者が共通語のメリットとして、「男らしい振る舞いができる」と話していたことから、日本語には男女で言葉を分けるという意識は未だ残っていると考える。共通語に残る男女差と、方言には無い男女差では、当事者および当事者の周囲に与える印象は大きく変わると言える。

調査2では、「トランスジェンダー」と「性同一性障害」の2つの言葉を取り上げ、当事者の印象を聞いた。調査対象者は、この言葉について、当事者と第3者では意味の捉え方で相違があると話した。当事者は「身体の障害」を表現できる「性同一性障害」が自分たちの生き辛さを表現できるとしている。近年は、LGBTに寛容になろうとする社会の動きから、「性同一性障害」よりも寧ろ「トランスジェンダー」という言葉が広まりつつある。言葉の広まりは、当事者の可視化に繋がるが、当事者が実際はどんなことを感じているのか、表現が社会に定着する前に立ち止まって考える必要がある。

本研究では、調査対象者が2名と少人数であったことや、FTMを自認する当事者のみで構成されていたために、調査に偏りがあった。本研究の結果をもとに、別の当事者にも言葉の意識を聞くことが重要である。また、当事者と非当事者では、言葉の印象が異なることから、非当事者にも言語意識を尋ね、今後も非当事者側からLGBT当事者へ歩み寄ることを続けていきたい。

### 参考文献

遠藤まめた (2018). オレは絶対にワタシじゃない はるか書房

本田朋子 (2001). どこが違う、女の子のここと男の子のこことば 遠藤織枝編 女とことば 女は変わったか日本語は変わったか 第11章 明石書店

マリィ・クレア (2007). 発話者の言語ストラテジーとしての<sup>切り抜ける・交渉・談判・掛け合い</sup>のネゴシエーション行為の研究 ひつじ書房

森山至貴 (2011). 呼称が立ち上げる〈わたしたち〉 ゲイ・バイセクシャル男性へのインタビューから 社会学評論, 62(1), 103-122

山中靖子 (2008). 現代日本語の性差に関する研究：文末表現を中心に 東京女子大学言語文化研究, 17, p. 87-100, 東京女子大学